

新闻摘要

にゅーすきじ ニュース記事から (2023年6月1日~2023年11月30日) にち

有关遗华日本人等、中国・库页岛归国者的新闻

ちゅうごくざんりゅうほうじんとう ちゅうごく・さ はりん きこくしゃかんれん にゅーす
中国残留邦人等、中国・サハリン帰国者関連のニュース



6月25日(星期日)

在日本最后一个日侨遣返港口所在地京都府舞鹤市，举行了一次“前舞鹤市立大浦初中学生‘倾听战争经历会’”。当年的初中生们讲述了他们在老师的带领下，于1956年和1957年（昭和31年和32年）迎接无声归来遗骨的回忆。其中一位还健在的当事人这样说道：“希望年轻的战争经历讲述人，包括初中生和高中生在内，能够将舞鹤遣返港口的历史传述下去。”

6月27日(星期二)

森田拳次先生是一位从前满洲（现中国东北部）被遣返到日本的漫画家，在他的倡导下，举办了题为“43人描绘的想象未来漫画‘2100年8月15日’”的特别展览。其中ちばてつや（千叶彻弥）先生、やなせたかし（柳濑嵩）先生等著名漫画家在作品中描绘了自战争结束155年之后的8月15日。地点是在东京新宿和平祈念展示资料馆（～10月1日）。日本漫画家协会会长千叶彻弥先生本人也是一名白遣返的人，他说：“我在想象一个未来——使人感到生活在这个世界上是多么的幸运。”

7月14日(星期五)

5名遗华日本人(中国归国者)代表和2名支援律师在厚生劳动省大臣办公室拜访了厚生劳动大臣加藤胜信，并交换了意见。这次会见起始于2007年（平成19年）7月当时的执政党项目组针对遗华日本人制定的新支援措施。但近几年由于受新冠病毒蔓延的影响，今年只有5名左右家住东京的归国者参加了本次活动。

8月14日(星期一)

在长野县阿智村的“满蒙开拓平和纪念馆”，为中小學生举办了“暑假儿童周”活动，让他们了解满蒙开拓的历史（8/14～20）。学生

6月25日(日)

日本で最後まで引揚港があった京都府舞鶴市で、「旧舞鶴市立大浦中の生徒の『体験を聞く会』」があった。当時の中学生たちが、1956、57年（昭和31、32年）に教師の引率の下で、無言で帰国した遺骨を迎えた思い出を語った。体験者の一人は、「中高生ら若い語り部たちに舞鶴の引き揚げを語り継いでほしい」と語った。

6月27日(火)

旧満洲（現中国東北部）からの引き揚げ体験を持つ漫画家の森田拳次さんの呼びかけで、ちばてつやさん、やなせたかしさんなど著名な漫画家が、終戦から155年後の8月15日を描いた企画展「43人が描く空想未来漫画『2100年8月15日』」が開催された。場所は東京新宿区の平和祈念展示資料館（～10/1）。自らも引揚者で日本漫画家協会会長のちばてつやさんは、「地球に住んでよかったという未来を想像しています」と語った。

7月14日(金)

中国残留邦人の代表5人と支援弁護士2人が、厚生労働省大臣室で、加藤勝信厚生労働大臣と面会し、意見交換を行った。この面会は、2007年（平成19年）7月に当時の与党プロジェクトチームが、中国残留邦人に対する新たな支援策を取りまとめたことをきっかけに実施されているが、近年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、面会に参加する残留邦人は首都圏在住の5人程度となっている。

8月14日(月)

長野県阿智村の満蒙开拓平和纪念馆では、小

们观看了一部概述满蒙开拓历史的视频后，在纪念馆工作人员和志愿者的带领下参观了馆内展览。有关人士表示，希望人们能从多方面关注这个问题，当时的国家政策不仅让那些被“动员”前赴开拓的团员们遭受了损害，也让中国人民被迫做出了牺牲。

8月14日(月)

14日，在东京都目黒区五百罗汉寺举行了“葛根庙事件”的悼念仪式，该事件是因前苏联军队进攻满洲而导致1000多名日本人丧生，许多人成了孤儿。来自日本各地的约40人参加了仪式。它是由事件的幸存者团体举办的，但由于他们都年事已高，这将成为最后一次仪式。该团体代表87岁的大岛满吉在此事件中失去了妹妹，他说：“我们一直在努力让人们了解这场悲剧，我们已经尽力做了所能做的一切，所以没有什么可遗憾的了。”



8月14日(星期一)

“所泽中国归国者交流会”会员约10人参观了在埼玉县所泽市市民文化中心举办的“为了和平的战争展”，并观看了介绍满蒙开拓团历史的展板。一位出生在中国的与会者（其母亲是遗留在中国的原开拓团员）说：“我希望在满洲所发生的事情，不仅仅限于当事者知道，应该让更多的年轻人也都能够了解。”

8月17日(星期四)

在但东町为曾经从兵库县前出石郡高桥村（现丰冈市但东町）迁往前满洲的“大兵库开拓团”举行了悼念仪式，有346人在日本战败后逃亡途中集体自杀或患病身亡。与会者中还可可见原开拓团团员的2代、3代的身影。一位在集体自杀中幸存下来的参与者说：“战争是一种极为可怕的行为，它可以毁掉一个人的一生。我觉得参加悼念仪式的人都会深刻认识到——战争是绝对要不得的。”

8月19日(星期六)

中高校生が満蒙開拓の歴史を学ぶためのプログラム「夏休み子どもWEEK」を実施した(8/14~20)。プログラム参加者は、満蒙開拓の歴史をまとめた動画を視聴した後、館職員やボランティアのガイドで館内展示を見て回った。関係者は、国策によって開拓団員に「動員」された被害の面に加え、中国の人々に犠牲を強いた加害性など多様な側面に関心を持ってほしいと語った。

8月14日(月)

旧ソ連軍の満洲進攻によって1000人以上の日本人が犠牲となり、多くの残留孤児を生んだ「葛根廟事件」の慰霊祭が14日、東京都目黒区の五百羅漢寺で営まれ、全国から約40人が参列した。事件の生存者らの団体が主催してきたが、高齢化で最後の式典となった。事件で妹を亡くした同会代表の大島満吉さん(87)は、「悲惨さを知ってほしいと動いてきたが、できることはすべてやったので心残りはない」と語った。

8月14日(月)

「所沢中国帰国者交流会」の会員ら約10人が、埼玉県所沢市市民文化センターで開かれた「平和のための戦争展」を訪れ、満蒙開拓団の歴史を紹介するパネル展示を観覧した。開拓団員だった母親が中国に残留し、中国で生まれた参加者は、「満洲について、何があったか、当事者だけでなく若い人にも知ってほしい」と語った。

8月17日(木)

かつて兵庫県旧出石郡高橋村(現豊岡市但東町)から旧満洲へ移住し、敗戦による逃避行の最中、集団自決や病気で346人が亡くなった「大兵库开拓団」の慰霊祭が、但東町で営まれた。元団員2世、3世らの姿もあった。集団自決を生き延びた参加者は、「戦争は人の一生を狂わす恐ろしい行為だ。慰霊祭の参加者には、戦争はあかんという意識を

第 26 届和平与合作记者基金鼓励奖获得者小原浩靖导演的纪录片《日本人的遗忘物——被遗留在菲律宾和中国的日本人》在大阪市淀川区上映（8 月 19 日～25 日）。该片主要记述了因战争混乱至今仍处于无国籍状态被遗留在菲律宾的日本后裔，以及战后 30 年后才回到日本的遗华孤儿心中的苦恼及严峻的现状。该片还把关注焦点放在了那些一直为遗孤提供帮助的市民身上。



8 月 23 日（星期三）

上皇陛下和美智子上皇后一直都在悼念和祭奠战争期间死去的亡灵，长期以来对满蒙开拓团的人们寄予深切的关怀。23 日上午，上皇夫妇在长野县轻井泽町休养期间，亲临了满蒙开拓团幸存者开垦的“大向田（おおひなた）开拓地”，并尽情享受了散步。该地区上皇夫妇早在皇太子和皇太子妃期间就曾访问过，已成为与战后从前满洲被遣返的人们及其家人加深交流之地。

8 月 26 日（星期六）

家住京都府的黑田雅夫（86 岁）出版了一本名为《活在今天——从满洲迁还记》的图画书，书中描绘了他在前满洲战败后失去家人、历经艰辛终于回到日本的 2 年间的经历。1944 年（昭和 19 年）6 月，7 岁的黑田先生作为京都市组建的“庙岭京都开拓团”的成员，与父母和弟弟一起前往满洲。黑田先生说，“我很高兴能把这本图画书留给那些从未经历过战争的年轻人。”

8 月 31 日（星期四）

因新冠病毒蔓延而中断的遗华日本人的短期回国又重新开始了（8/31～9/11）。此次有 6 名参加，3 名遗华日本人和 3 名护理人员。逗留期间，他们游览了箱根地区，在船桥的大型购物中心购物，充分享受了阔别已久的日本。他们表示明年还想再次回到日本。



「^{たか}高めてもらえたと感じる」と話した。

8 月 19 日（土）

第 26 回平和・協同ジャーナリスト基金賞^{だいいへいわきやうどうじやーなりすと きぎんしやうしやう} 奨励賞を受賞した小原浩靖監督のドキュメンタリー映画「日本人の忘れもの フィリピンと中国の残留邦人」が大阪市淀川区で上映された（8/19～25）。戦禍の混乱で今も無国籍状態に置かれるフィリピン残留日系人、戦後 30 年を経て帰国した中国残留孤児の苦悩の歴史と現状に迫った作品。支援を続ける市民らにも焦点を当てている。

8 月 23 日（水）

戦争の犠牲者への追悼と慰霊を続けられている上皇陛下と美智子さまは、満蒙开拓団の人たちにも長い間心を寄せ続けてこられた。長野県軽井沢町で静養中の 23 日午前、上皇ご夫妻は満蒙开拓団の生き残りの人たちが開墾した「大日向开拓地」を訪問し、散策を楽しまれた。同地区は、ご夫妻が皇太子夫妻時代から訪れ、引き揚げ者や家族らと交流を深められた場所。

8 月 26 日（土）

京都府在住の黒田雅夫さん（86）が、旧満洲で戦後に家族を失い、苦難の末に帰国するまでの 2 年間の体験をまとめた絵本「今を生きる——満洲からの引き揚げの記録」を出版した。黒田さんは 7 歳だった 1944 年（昭和 19 年）6 月に京都市で結成された「廟嶺京都开拓団」として、両親と弟とともに旧満洲へ渡った。黒田さんは「戦争を知らない若い人に、絵本を残せることがうれしい」と語った。

8 月 31 日（木）

新型コロナウイルスの影響で途絶えていた中国残留邦人の集団一時帰国が再開された（8/31～9/11）。参加者は中国残留邦人 3 名と介護人 3 名の 6 名。滞在中は箱根方面の観光や船橋の大型ショッピングセンターでの買い物など、久々の日本を満喫

9月12日(星期二)

及川裕子(46岁)是一位居住在北海道札幌市的家庭主妇,她希望发挥自己大学期间在北京和上海留学时所学到的汉语,接近和帮助那些回国后无法融入当地社会、处于孤立状态的老遗华日本人的生活,成了北海道归国者支援交流中心的一名“交谈志愿者”,用中文陪归国者们聊天说话。她说:“我想为归国者设立一个安心讲中文的时间。为实现这一目标,当地社区的理解与协助是必不可少的。”

9月23日(星期六)

长野县“上伊那教育会”在伊那市伊那公园为战争期间被派往前满洲的“满蒙开拓青少年义勇军”的死难者举行了悼念仪式。在上伊那,曾有500多名14岁~18岁的人作为志愿军前往满洲。参加悼念仪式的大约有40人,包括该会成员和死者家属。他们向立像“少年之塔”献了花,这座雕像是为了纪念在前满洲等地丧生的91名上伊那人而建造的,并发誓“再也不会重蹈覆辙。”

9月23日(星期六)

在石川县珠洲市,举办了一次享受现代艺术的“奥能登国际艺术节2023”(~11月12日),共有62件作品在该市10个区的室内和室外场地展出。其中弓指宽治先生的作品《超越时空之地》,以绘画和文字的形式表达了战争期间从珠洲前往满洲的拓荒者们的故事。意旨让人们沿着作品中设置的海角自然小径漫步时,能重温一下拓荒者们的艰辛和战争的残酷。

9月28日(星期四)

北海道归国者支援交流中心在札幌市东区分中心举办了“第1届文化交流会”,这是从库页岛和中国返回的归国者与市民之间的交流活动。其目的是将交流范围从归国者之间扩大到市民,使更多人了解归国者的历史。现年58岁的菅原・柳德米拉(リュドミーラ)女士是从库页岛回来的日本人第二代,她亲手做了一道俄罗斯家

し、参加者は来年もぜひ帰国したいと話していた。

9月12日(火)

北海道札幌市在住の主婦・及川裕子さん(46)は、大学時代に北京や上海へ留学して学んだ中国語の経験を活かして、日本に帰国後も地域になじめず孤立する元中国残留邦人の暮らしに寄り添いたいと思ひ、北海道中国帰国者支援・交流センターの「語りかけボランティア」になった。中国語で帰国者の話し相手をしている。「帰国者が安心して中国語を話せる時間をつくりたい。そのためには地域社会の理解と協力が欠かせないと強く思う」と語った。

9月23日(土)

長野県上伊那教育会は、戦時中に旧満洲へ送り出された満蒙开拓青少年義勇軍の犠牲者の慰霊祭を、伊那市伊那公園で開いた。上伊那では、14歳~18歳の500人以上が義勇軍として満洲に渡った。慰霊祭には、会員や遺族ら約40人が参列。現地などで亡くなった上伊那地域出身の91人を悼んで建てた立像「少年の塔」に献花し、「二度と同じ過ちは繰り返さない」と誓った。

9月23日(土)

石川県珠洲市では、現代アートを楽しむ「奥能登国際芸術祭2023」が開催(~11/12)され、市内の全10地区の屋内外の会場に計62点の作品が展示された。その中に、戦時中に珠洲から旧満洲に入植した開拓団員らの物語を絵画と文で表現した、弓指寛治さんの作品「プレイス・ビヨンド」もあった。これは作品の置かれた岬の自然歩道を歩きながら開拓や戦争を追体験するというもの。

9月28日(木)

常菜——施特罗加诺夫炖牛肉。27 名市民参加了活动，并享受了正宗的俄式味道。

9 月 30 日 (星期六)

9 月 30 日和 10 月 1 日一部讲述满蒙开拓历史的独角戏《花一匆》(はないちもんめ)(编剧: 宫本研)在长野县伊那市上演, 为期两天。这部戏来之于由上伊那地区居民组成的戏剧团“风庵崛起”。现年 52 岁的伊藤初绘登台演出。她在心中想象着那些战后从前满洲被遣返的人们、遗华孤儿和中国养父母所经历的悲伤和艰辛, 全身心投地入了排练, 并表示“希望能将其传承给子孙后代。”

10 月 3 日 (星期二)

家住佐贺县多久市的坂口康子女士(86 岁, 出生于中国抚顺市), 二战后在前满洲成为战争孤儿, 与四个兄弟姐妹一起被遣返到日本。她出版了一本名为《蚂蚁的眼泪》一书, 书中记述了战争的惨祸以及她去给埋葬在西伯利亚的父亲扫墓的经历。她把蚂蚁在一条线上向某一方向移动的形象与被遣返的人们的身影叠加在一起做为书名。希望“此书能把对和平的心愿传达给那些从未经历过战争的年轻人。”



10 月 10 日 (星期二)

长野县泰阜村泰阜初中的 30 名学生, 在参加 18 日为村里的战死者和开拓团的死难者的悼念仪式之前, 专门上了一堂课, 事先了解一下跟自己同一年龄段的满洲青年义勇军丧失宝贵生命的历史。由村民有志之士组成的“满洲开拓历史传述会”的岛崎友美(38 岁)担任讲师。策划本次课的社会科老师木藤冈美绪(28 岁)说: “我希望通过学习了解满蒙开拓团史, 让学生们能够从各个角度去看待理解别人。”

10 月 11 日 (星期三)

长野县阿智村“满蒙开拓平和纪念馆”和名古屋男声合唱团, 在村中央公民馆大厅举办了一

北海道中国帰国者支援・交流センターでは、サハリン(樺太)や中国から引き揚げた元残留邦人と市民との交流事業「第 1 回文化交流会」を札幌市東区民センターで行った。交流の対象を帰国者同士から市民に拡大し、残留邦人の歴史をより広く知ってもらうのが目的。サハリン残留邦人 2 世の菅原リュドミーラさん(58)が、ロシアの家庭料理ビーフストロガノフの作り方を紹介した。市民ら 27 人が参加し、本場の味を楽しんでいた。



9 月 30 日 (土)

満蒙開拓の歴史を扱った一人芝居「花いちもんめ」(作: 宮本研)が 9 月 30 日と 10 月 1 日の 2 日間、長野県伊那市で上演される。上伊那地域の住民でつくる劇団「風の庵から」によるもので、舞台に立った伊藤初絵さん(52)は、旧満洲からの引き揚げ者や残留孤児、中国人養父母らが戦後も抱えたであろう悲しみや苦労を想像し、「芝居が子孫の世代にも広まってほしい」と稽古に励んだという。

10 月 3 日 (火)

第 2 次世界大戦後に旧満洲で戦争孤児となり、きょうだい 4 人で日本へ引き揚げてきた佐賀県多久市在住の坂口康子さん(86)(中国撫順生まれ)が、戦争の惨禍や、父親が眠るシベリアを墓参した様子をまとめた著書「蟻のなみだ」を出版した。一列になって一定の方向に進むアリの姿に引き揚げ者の姿を重ね著書名とした。「戦争を知らない若い人に、平和への思いを伝えられれば」と願う。

10 月 10 日 (火)

長野県泰阜村泰阜中学校の生徒 30 人が、村の戦没者と開拓犠牲者の追悼式への参加(18 日)を前に、自分たちと同世代が犠牲になった満蒙開拓青少年義勇軍について授業で学んだ。村民有志でつくる「満蒙開拓の歴史を伝える会」の島崎友美さん(38)が講師を務めた。授業を計画した社会科の木藤岡美緒教

场传述满蒙开拓史的合唱组曲《被遗弃的人们》。合唱团成员根据佐佐木刚辅（89 岁，家住爱知县丰桥市）的诗集，花了大约两年时间创作了这组歌曲。佐佐木刚辅是前富草村（现阿智村）人，小时候跟随开拓团前往满洲。该馆长寺泽秀文（69 岁）表示：“这组歌曲从多个角度把满蒙开拓史里所含的各种复杂性，如希望与绝望、被害与加害、国家与国民，都表现出来。”

10 月 11 日（星期六）

由首都圏归国者支援交流中心主办的“对遗华日本人等加深理解的聚会”，在茨城县水户市举行，包括茨城县居民在内的约 120 人参加了此次聚会。会上筑波大学名誉教授伊藤纯郎做了“茨城县和满洲移民”的演讲，此外还有 2 位战后一代的讲述人做了讲话，与会者纷纷表示，“以前从未听说过有茨城县的人前往满洲的事。”



◆ 请注意：本栏目的新闻为见诸报端的报道摘要，并非政府正式公布的内容，其中一部分还包含媒体的观察消息。

ゆ 論 (28) は「満蒙開拓を学ぶことで、いろいろな角度から
ひと りかい
人を理解することにつなげてほしい」と話した。

10 月 11 日（水）

長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館と名古屋男声合唱団は、満蒙開拓の歴史を伝える合唱組曲「棄民」を村中央公民館ホールで披露した。旧富草村（現・阿智村）出身で幼少期に開拓団員として旧満洲へ渡った佐々木剛輔さん（89 / 愛知県豊橋市在住）の歌集を基に、合唱団員たちが 2 年ほどかけて制作したもの。同記念館の寺沢秀文館長（69）は「希望と絶望、被害と加害、国と民といった満蒙開拓が内包する複雑さが多面的に表現されている」と話した。

11 月 11 日（土）

首都圏中国帰国者支援・交流センター主催の「中国残留邦人等への理解を深める集い」が、茨城県水戸市で開かれ、茨城県民など約 100 人が参加した。筑波大学伊藤純郎名誉教授による講演「茨城県と满洲移民」のほか、2 人の戦後世代の語り部の講話があり、参加者からは、「茨城県から満洲へ渡った人のことについて初めて知った」との感想があった。

◆ ご注意：本欄の内容は、一般の新聞などで報道された内容を中心に要約して掲載しています。したがって、政府が公式に発表したものではなく、一部には報道機関の観測記事なども含まれています。

